

ユネスコ無形文化遺産 国指定無形民俗文化財

知立まつりの山車文楽・山車からくり

知立市立竜北中学校 教頭 杉浦 卓次

知立5町が江戸時代から引き継いできた人形浄瑠璃芝居が、今年5月、6年ぶりに再開する。

知立まつり

知立神社の祭礼である「知立まつり」は、1年おきに本祭と間祭が5月2、3日に行われます。山車の上での文楽、からくり人形芝居の上演は、江戸時代から続いています。

本祭は、山町・中新町・本町・宝町・西町の5つの地区から、高さ7メートル、重さ5トンの5台の山車が繰り出されます。お囃子に合わせて巡行するさまは大変優雅です。さらに、山車の上で奉納上演される人形浄瑠璃芝居の山車文楽とからくりは、ともに江戸時代から伝承されている郷土芸能です。かつては、山車の上段でからくりを、下段で文楽を上演していました。現在では、西町だけがからくりを、他の4町が文楽を上演しています。

4月はじめに各町で、宿開きが行われ、梶棒連、囃子連、人形連（西町は唐練連）がそれぞれに分かれて約1か月の準備・練習を行います。町内での稽古上げで、囃子や人形の練習成果が披露され、祭りを迎えます。当日は、各町内の山車蔵から山車が出発し、町内を運行しながら旧東海道に勢ぞろいします。5町が順に知立神社への宮入りを行い、その後、順番に境内で文楽やからくりを上演します。

間祭は、5町から勇壮華麗な5台の花車が繰り出されます。若衆が中心に行い、山車文楽とからくりはありません。本祭の山車の構造は2層で、車輪は内輪で松の大木を輪切りにしたものです。形態は知多地域の山車に似ていますが、彫刻に金ばくを施し、きらびやかです。梶棒が後方だけにあるのが

特徴です。太平洋戦争後に再開された山車文楽・山車からくりは、この70年余りの間で、存続が危ぶまれる時期もありました。どのように現在を迎えているかを見ていきます。

戦後の山車文楽・からくり

1948年に山車奉納が再開されました。その後、高度成長期を迎え、祭りを担う町民の多くがサラリーマンとなり、レジャーが多様化したこともあって、祭りにかかわる者も次第に減り、特に人形遣いの後継者が目に見えて減ってきました。そのため、祭りを文化財として登録することで、その存続を図ろうとする町の動きが出てきました。1956年に、山町・中新町の人形浄瑠璃が、「知立の山車文楽」と

このままでは、祭りが衰退すると考えた関係者は、間祭に花車を復活させたという若衆の思いを受け、祭を取り仕切る祭惣代の寄合である五ヶ町寄りに働きかけ、祭惣代の承諾を得ることができました。そして1975年、若衆を中心とする間祭は復活しました。さらに同年、祭りの人形遣いの後継者不足で悩んでいた山町の知立山車文楽保存会長の神谷定一氏は、山町の青年の集まりの「青友会」に声をかけ、山車文楽を復活させることができました。その後、そのメンバーが、知立山車文楽保存会の主要メンバーとなり、山車文楽の上演の中心となっていきました。

このような動きの中、1977年には、全国で31件の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の一つに、知立山車文楽が選ばれました。それ以後、メディアに取り上げられることも多くなり、祭礼保存の機運が高まってきました。

危機を乗り越え

ユネスコ無形文化遺産へ

1990年には、山車文楽保存会とからくり保存会がまとまり、知立の山車文楽とからくりが一体となって、国指定の無形民俗文化財となりました。さらに1992年6月には、イタリアで開催された世界人形劇フェスティバル92第16回ウニマ大会にからくり・文楽保存会より総勢25名が参加しました。このように、知立の山車文楽とからくりの名声が高まる中、人形の後継者育成はそれぞれの町だけでは難しく、と強く感じた山車文楽・からくり保存会は、市からの予算の交付を受けて、後継者育成を始めました。1992年には、「知立市義太夫会」を発足させ、豊澤千賀龍師匠の指導のもと、稲垣春喜さんらの協力を仰ぎ、地元の大夫育成に乗り出しました。竜北中学校には山車文楽クラブが発足しました。2000年には、知立市文化会館が



山車からくり

2014年には「全国山・鉦・屋台保存連合会知立大会」の総会・研修会が、知立まつりに合わせて開催されました。そして、2016年、知立まつりの山車文楽・からくりが、山・鉦・屋台等と呼ばれる山車が巡行する全国33か所の祭とともに、ユネスコ無形文化遺産に登録されました。祭礼時には、登録以前にも増して観光客が増え、山車文楽・山車からくりの人形上演が大きくクローズアップされるようになりました。

おわりに

ところが、2020年からはコロナ禍のため、思うように人形公演ができなくなりました。このような状況においても各町の祭り関係者は、2021年以降も文楽・からくりの稽古を地道に続けてきました。市内での人形上演を披露する機会を設け、その技術を途絶えさせることなく、継承し続けてきました。

来る5月には、6年ぶりに本祭が行われます。伝統的な知立まつりが続いてきたのは、祭り関係者の永続的な努力の賜物であることを忘れてはなりません。



山車文楽

4月はじめに各町で、宿開きが行われ、梶棒連、囃子連、人形連（西町は唐練連）がそれぞれに分かれて約1か月の準備・練習を行います。町内での稽古上げで、囃子や人形の練習成果が披露され、祭りを迎えます。当日は、各町内の山車蔵から山車が出発し、町内を運行しながら旧東海道に勢ぞろいします。5町が順に知立神社への宮入りを行い、その後、順番に境内で文楽やからくりを上演します。

開館しました。同年10月には、シアターカレッジが開講し、人形遣い・語り・三味線の稽古が進められました。「講座文楽・人形遣い」の講師は、吉田清之助（現在の豊松清十郎）氏でした。本来は、各町内で育成すべき人形師・三味線、義太夫等をシアターカレッジで育成することになりました。こうして、人形遣いに関係する後継者の育成が、それぞれの町の枠をこえて始まりました。1996年には、知立山車連合保存会が立ち上げられ、「全国山・鉦・屋台保存連合会」に加盟しました。



山車5輛勢ぞろい